〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌』第十一回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。

四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった四四〇首（一般部門）の中から第十一回目となる年間優秀作品が決定いたしました。

また、ジュニア部門において、秋の部では「盛岡市立飯岡中学校」、「岩手県立盛岡青松支援学校」より多くのご投稿をいただきました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（二首）

チャグチャグと馬コが渡る中津川　背に乗る吾子に初夏の風ふく

岩手県矢巾町　小野寺　一洋

【受賞者からのコメント】
チャグチャグ馬コが開催される日は、昔から晴れの特異日で、盛岡は、初夏の爽やかな風に包まれます。特に、中津川を渡る時の涼しい風は、長い道のりを馬コの背に揺られてきた子どもにとって、最高のご褒美です。今回の受賞も最高のご褒美です。ありがとうございました。

【審査員講評】
（山本玲子）チャグチャグ馬コの日は晴れ渡ることが多い。鈴の音が連なり、吾子が馬コに揺られて中津川を渡る。長い道のりに飽きた子は、ついウトウトとしてしまう。そんな吾子の頬を初夏の風が優しく撫でてゆく。
（松田）装束をつけた「馬コ」が中津川を渡る場面から、馬の背に揺られる「吾子」に視点を移すという展開が見事です。吾子は男の子か女の子か分かりませんが「初夏の風」に吹かれて気持ち良さそうです。
（山本豊）初夏の風のなかを、チャグチャグ馬コの背に乗り中津川を渡るわが子の姿を見守る親の優しさが素直に伝わってきます。親子の絆の深さも感じさせられます。子供さんにとっては記念となる歌として記憶されることでしょう。
（赤澤）盛岡の初夏の風物詩、チャグチャグ馬コを素材にした歌。下の句が上手くまとめられています。馬の背に乗ったお子さんに「初夏の風ふく」と、さり気なく詠んだところが成功です。とても心惹かれる歌です。

年間優秀賞（三首）

この秋も鰭破れたる鮭いくつ　与の字橋にて魚影に見入る

盛岡市　石川　修子

【受賞者からのコメント】
歌にまとめるという視点で盛岡を見ると歌材になる場所や行事が結構あり、ふる里を見直す契機になりました。また、どこで切ってひと呼吸入れるかで歌の感じも変わるような気がして、三行書きも勉強になりました。ありがとうございました。

【審査員講評】
（山本玲子）橋の上から川に映る魚影に思わず見入ってしまう。鰭の破れはむろん見えはしない。しかし、たとえ見えなくてもわかるのだ。何故なら大海原を渡り、時には生命の危機すら切り抜け、こうして生まれ故郷に戻ってきたのだから。
（松田）河口から二百キロという気の遠くなるような距離をひたすら遡上する鮭。放流された盛岡の川に辿り着く頃には鰭の破れた魚体も珍しくありません。与の字橋からその姿に「見入る」人々の思いは限りなく優しいのです。
（山本豊）毎年秋になると、太平洋から二百キロも遡上して中津川にたどり着き命を繋ごうとする鮭の懸命な姿が見られます。感情を抑えた表現により印象が鮮やかに捉えられています。産卵後の鮭の行く末も暗示させる内容です。
（赤澤）盛岡の中津川は、市街地を流れていますが、鮭が上る川として知られています。「鰭破れたる」は、観察が行き届いており、「与の字橋」の具体は、歌を確かなものにしています。丁寧に詠まれている作品です。

幼き日　祖父と歩きし北上の川辺を今日は我が子と歩く

宮城県登米市　佐藤　礼佳

【受賞者からのコメント】
激動の昭和、十六才の祖父は家督ながら海軍に志願し、駆逐艦萩風に乗船。奮戦するもベラ湾夜戦にて沈没。その後台湾高雄に上陸、爆撃を受け、光を失いました。戦後、盲学校で出会った祖母と、三人の子を育て、若き日は盲目ながら私の父高雄と泳いで北上川を渡ったそうです。晩年は私と手を繋ぎ、よく北上の川辺を散歩しました。苦労して育ててくれたその手のぬくもりは生涯忘れません。素晴らしい賞を、ありがとうございました。

【審査員講評】
（山本玲子）この子は私が祖父に手を引かれた遠い想い出があることなど想像もつかないに違いない。しかし、いつの日か我が子も親となり北上の川の流れを見つめる日が来るだろう。きっとそのときに初めて祖父の気持ちがわかるに違いない。
（松田）「祖父」のお住まいが盛岡で、作者は幼い頃よく遊びに来られたのでしょう。手を繋ぎ岸辺を散歩するのが常だったのでしょうか。「今日は我が子と歩く」は様々の事を含む重みのある表現と思いました。
（山本豊）祖父と作者、作者とその子という人間関係により、命の繋がりの重みというものを強く感じさせられます。それが川の流れと並立されると、より一層、時の流れの悠久さを思わせてくれます。川辺を歩むと人は詩的になれます。
（赤澤）作者は、幼い日北上川の川辺を祖父と歩いたことを覚えています。その記憶の刷り込みが、お子さんと再び歩かせたのでしょう。それは小さなことかも知れませんが、短歌に素材がぴったりと嵌まっています。

年間奨励賞（二首）

改札ではじける笑顔　風鈴が「おかえりなさい」と輪唱している

宮城県仙台市　郷家　美磨

【受賞者からのコメント】
昨夏、久しぶりの盛岡駅。改札へ向かうと涼やかな音色。ああ、どこかで南部鉄の風鈴たちが並んで揺れている。人々は再会の喜びにあふれていた。父も夫も転勤族だったため私には明確な故郷がない。けれどあの瞬間、温かなものに抱かれたような心地になり、便乗してそっと「ただいま」とつぶやいた。

【審査員講評】
（山本玲子）幼い子供たちと一緒の里帰り。改札口では祖父母らが満面の笑みを浮かべて迎えてくれる。迎える人、迎えられる人たちの心が、アナウンスの声とともに南部風鈴の音となって奏でている。
（松田）駅の改札口付近でよく見られる光景です。出迎えの人と迎えられる人、双方の「はじける笑顔」がいいですね。更にはたくさんの南部鉄器の風鈴が〝「おかえりなさい」と輪唱している〟と言い切った表現も見事です。
（山本豊）擬人法で短歌を作ることは難しいことですが、この歌は喜びの感情を素直に表現したことにより成功しています。「改札ではじける笑顔」には、出迎えてくれた風鈴に対する作者の純心な気持ちが表れています。
（赤澤）この歌は発想が独特です。風鈴を擬人化しています。擬人化は短歌の技術としては難しいものです。改札と風鈴の鳴る音を逃さず、上手く配置されています。短歌の巧拙は、言葉の配置と言っても良いのです。

柔らかき言葉に飢えて盛岡の友の声聞く久方振りに

青森県青森市　鈴木　操

【受賞者からのコメント】
北国に移り住んで五年。土地の方々の情の深さのお陰で、日々平穏に過ごしておりますが、心が疲れると無性に岩手が恋しくなります。そんな時は、盛岡の友人の優しさ柔らかさに絆り、癒され意欲をも頂いております。

【審査員講評】
（山本玲子）盛岡の方言は、相手の心のひだを窺いながら言葉となって伝わってゆく。きっと盛岡の友も私の心を察して「おめはん、最近、なんたになってた
の？」と返ってくるに違いない。
（松田）作者がふだん耳にする言葉は「柔らかき」という感じではないのかもしれません。「飢えて」の一言にインパクトがあります。おっとりとした盛岡訛りが恋しくなった時に電話できる友人の存在は有り難いですね。
（山本豊）石川啄木の「ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聞きにゆく」を思わせる内容の歌です。作者にとっては、盛岡弁で友人と話しをすることが、心に安らぎをもたらしてくれる大切なひと時なのでしょう。
（赤澤）言葉は風土を生み、人を育みます。この歌は「柔らかき言葉に飢えて」で読者をすぐに捉えました。短歌は、時間をかけず読者を引き込むことが大切。作者の心には、盛岡弁が懐かしく響いたことでしょう。

第十二回年間最優秀賞決定！

“啄木のふるさと”『もりおかの短歌』

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。
四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三六三首（一般部門）の中から第十二回目となる年間優秀作品が決定いたしました。
今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（二首）

君が住む不来方のさと秋めいて剥きたての柿軒を色どる

盛岡市　赤坂昌信

【受賞者からのコメント】
秋になると剥きたての柿をあちらこちらで目にします。冬干柿色に変わりますがやはり軒を彩るのは剥きたての柿です。そんな風景が私の心を癒してくれるのです。その情景を詠んだ短歌が年間最優秀賞に選ばれて光栄です。

【審査員講評】
（松田）盛岡の雅称「不来方」が歌の内容にしっくり馴染みます。作者も盛岡の人ですが、軒に「剥きたての柿」の見える「君が住む」里は郊外でしょうか。皮を剥いた柿の実の瑞々しい色彩も詩情を醸します。
（山本豊）「君が住む不来方のさと」の抑制された情感と、「剥きたての柿軒を色どる」の具体が調和し、印象深い作品である。特に「剥きたての柿」が詩情を深いものにしている。
（赤澤）秋の風景を詠んでいます。軒に剥いた柿を吊るす光景は、昔より少なくなったと思いますが、作者は逃さず情感のある歌にしました。短歌のお手本のように感じられます。詰め込み過ぎず、三行書きにも気を配っています。
（山本玲子）鮮やかなだいだい色の柿の実は、今、誰かが剥いたばかりの様に軒に吊るされている。このような長閑な盛岡で暮らしている君は、やはり秋を味わっているのだろうか―。このような風景を見ると急に恋しく思われるものである。

年間優秀賞（二首）

風薫る好摩の駅舎より仰ぎ見る啄木焦がれし姫神の峰

東京都港区　鈴木有介

【受賞者からのコメント】
岩手町の特産に入居している祖母の見舞いへ赴く途上、渋民・好摩で右に左にと目をやるのが何よりの楽しみです。岩手山に姫神山、盛岡で見なれた山景とはひと味違う格別の美しさ。歌人・啄木のこころの玉手箱に触れる思いがします。

【審査員講評】
（松田）薫風の季節に好摩を訪れた作者。「啄木焦がれし」ピラミッド型の姫神山の山容が殊に美しく見えたことでしょう。駅舎を「えき」と読ませていますが表記も「駅」で良いと思います。
（山本豊）渋民駅が出来たのは昭和二十五年であるから、啄木が列車に乗るには好摩駅まで来なければならなかった。啄木と好摩駅のホームから見る姫神山との組み合わせが成功している。
（赤澤）作者は東京都の方です。啄木に惹かれての旅だったかも知れません。好摩駅から見える姫神山に感動したことが、素直に詠み込まれています。県外の作者だったからできたと思います。作者の心は素直に、感動に向いています。
（山本玲子）北海道へ旅立つときの啄木は、故郷と永久の別れになるかと思うと、「静けく長閑けき駅の春、日は暖かけれど、予は骨の底のいと寒きを覚えたり」と述べる。そんな啄木に姫神山の美しい姿が目に焼き付いたことだろう。

盛岡のお城の堀にぽっちゃんと栃の実落ちて秋の深まる

盛岡市　鈴木　充

【受賞者からのコメント】
盛岡商工会議所から不審な封筒が届いた。春夏秋冬の入選発表にしては時期が変。開封すると年間優秀賞に選定されたとの事。顧みれば『もりおかの短歌』の落選が続き「もうやめ～めた」と思った事もあった。その度に思い直し続けた。「継続は力」はある意味真実なような気がする。拙作の「ぽっちゃんと」は今考えると稚拙な感もあるが結果オーライという事であまり詮索しない事に。ありがとうございました。

【審査員講評】
（松田）オノマトペ（擬音語）「ぽっちゃん」は思いがけない音として作者の耳に届いたことでしょう。下の句は推量の表現「栃の実の落つ秋深まらん」とすることで更に良くなると思います。
（山本豊）盛岡城址公園の秋の様子が素直に伝わってくる。栃の実が堀に落ちて、「ぽっちゃん」という音を立てたという表現が歌を優しくしている。擬音語の使い方の成功した歌。
（赤澤）作者の目の前で、栃の実が実際に落ちたのでしょうか。この歌の見所は「ぽっちゃん」です。簡単に見えますが、作者は苦心したと思います。短歌は擬音語で成功したり、失敗したりします。勿論、この歌の場合は成功です。
（山本玲子）「秋は譜れの笛によろしき」と啄木が表現するように、音が秋の訪れを知らせてくれる。盛岡のお城の周辺には栃の木がたくさんある。その実の落ちる音に、いよいよ秋が深まっていくことを感じさせる。

年間奨励賞（二首）

名水の冬温かく湧く水を若水として新年祝う

盛岡市　堀米公子

【受賞者からのコメント】
最近、歌に詠んだ名水「青龍水」が枯れたということでその界隈に行ってみました。近所の人達も心配していました。再び湧き出ることを願っています。数年前の冥水を汲んでいたら、東京の立教大学の学生さん達に囲まれて、“わき水”について質問されました。私は「関市出身で盛岡に住んで六十年になります。雪掻き三時間、さんさ踊り三十年、毎日啄木の詩の時報になじみ、伊達から南部藩に変身しました。名水の歌材は、そのためでなく、おいしい水で茶や料理をという発想で偶然「歌」が出ました。偶然といえば、戊辰の義士、楢山佐渡の近くに墓を持ちました。佐渡のことも詠んだことがあります（取り上げられず）。ますます盛岡に慣れ、愛して行きたいと思います。その中から自分でも気に入った歌を詠みたいと思います。この度の“励みの賞”うれしく思います。

【審査員講評】
（松田）詠い出しから「名水の」と説明してしまったことが惜しまれます。二句以降の表現から「きっとコレは名水だろう」と読者には伝わるはずです。初句に場所を入れては如何でしょうか。
（山本豊）若水は元日の朝に汲む水のことであるが、一年の邪気を除くとも言われる。新年を祝う歌としてうまくまとめている。「冬温かく湧く水」の表現が歌を上質なものにしている。
（赤澤）良い短歌のお手本のような作品です。盛岡は湧き水が各所にありますが、通年、水温は一定です。そこを「冬温かく」と詠みました。「若水として新年祝う」は、心に決めていたことなのでしょう。上手にまとめています。
（山本玲子）湧き水は冬温かく、夏に冷たい。盛岡の下町にある湧き水は、生活用水として利用されている。元旦には若水を汲み、その水でご飯を炊いて食べて無病息災を祈る。そんな下町の人々の涎潤とした笑顔が浮かんでくる。

ふきのとう朝日に照らされ春告げる旬を探しに神子田朝市

埼玉県さいたま市　片山奈桜子

【受賞者からのコメント】
昨年度まで彼が住んでいたので、盛岡には何度も足を運びました。四季折々の景色のなかで印象に残っているのが、まだ寒さが残る三月に一緒に訪れた神子田朝市です。たくさんの思い出がある盛岡にいつかまた行きたいです。

【審査員講評】
（松田）少々ぶっきらぼうな表現ですが、朝日に照らされた蕗の薹が春を告げている、と断定した表現に説得力があります。「旬を探しに神子田朝市」とは、もしかして盛岡のご出身でしょうか。
（山本豊）ふきのとうは、雪がまだ消え残っている頃から芽を出す、それこそ春を告げる植物である。天ぷらにしても、ふき味噌にしても美味しい。結句の「神子田朝市」が生きている。
（赤澤）埼玉県の方の歌です。「神子田朝市」の具体名が出ているので、事前に調べたのでしょう。私も経験しましたがお店巡りは楽しいものです。作者は偶然、朝日に照らされているふきのとうを見ました。迷わず出来た歌でしょう。
（山本玲子）夜の明けきらぬうちから盛岡の神子田の朝市へ行く人々は、何かいい物を探しに行くように嬉しそうだ。春の使者「フキノトウ」は一層、長い冬を過ごした北国の人々の心を一層はずませる。

〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌』第十三回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。

四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三〇四首（一般部門）の中から第十三回目となる年間優秀作品が決定いたしました。

今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

群舞するさんさの夏が恋しくて想ひを馳せる盛岡の街

盛岡市　河野　康夫

【受賞者からのコメント】
盛岡の夏の風物詩である、さんさ踊りが新型コロナウイルスの影響で中止になった。いつもの盛岡の夏に戻ってほしい。
何度か応募しましたが、この度は年間最優秀賞に選んで頂きありがとうございました。

【審査員講評】
（松田）「群舞するさんさ」は藩政時代から伝わる盆踊り「さんさ踊り」のこと。昨年はコロナ禍で中止となりましたが、この夏も終息は難しいと思われます。そんな現状なればこそ、「さんさ踊り」が「恋しくて想ひを馳せ」てしまう作者の心中もよくわかりますし、大方の市民の「想ひ」でもありましょう。
（山本豊）作者の想いが素直に表現されていて、読み手にストレートに伝わってくる歌です。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、さんさ踊りが中止になってしまったことに対する作者の無念さも感じられます。
（赤澤）さんさ踊りは、数十年の歴史を重ね、盛岡の夏の行事として定着しました。作者はさんさ踊りのない夏を寂しみ、歌に詠んだのでしょう。「想ひを馳せる」に作者の心情が籠っており、素直に気持ちを表現した良い歌です。
（山本玲子）「踊は田舎一年中の最大快楽である」と啄木は述べる。一糸乱れぬばちさばきにさんさ太鼓がこだまする。盛岡の夏の快楽。その最大の快楽を今年もまたコロナに奪われた。故に一層、故郷を恋しく思わせるのであろう。

年間優秀賞（二首）

不来方の城から見ゆる岩手山残雪線が点になりゆく

盛岡市　鈴木　充

【受賞者からのコメント】
受賞作を読み返してみると「残雪線が点になりゆく」が「残雪線」と誤解される可能性があると猛省。そもそも残雪が線や点である訳がない。残雪は面で次第に面積が減ってゆくのが自然。甘ーく見てもらえた事に感謝です。

【審査員講評】
（松田）岩手山に降り積もった雪が、春になり融けて徐々に消えてゆく過程を興味深く捉えています。「残雪線」という新鮮で驚嘆に値する表現に思わず頷きました。二句「城から見ゆる」の「城」は既に存在しないのですから、正しくは「城址より見ゆる」という表現が適切でしょう。
（山本豊）晩春の岩手山が、残雪の移りゆく様子を丁寧に表現することにより、情景が鮮明に伝わってきます。
又、作者が不来方城の城跡から岩手山を見ているということも、歌の内容に深みを持たせています。
（赤澤）岩手山の残雪の消えてゆく様を、作者独自の目線で捉え、とても良いと思います。下の句の「残雪線が」の表現は字余りとなっても、「残雪の線が」の方が分かり易いと思います。日常に作歌している作者だろうと思います。
（山本玲子）不来方城の二の丸に啄木歌碑がある。百年以上も前、啄木はこの岩手山から季節の移ろいを感じ取ったことであろう。啄木と同様に作者の目には冬の記憶を跡形もなく消し去る盛岡の春が浮かび上がったに違いない。

故郷を離れこの地に学ぶ子を抱き守れよもりおかの空

愛知県一宮市　五十嵐　理子

【受賞者からのコメント】
子のひとり暮らし準備のため初めて訪れた盛岡は、思った以上に遠く寒く、どうか無事でと祈るよりほかありませんでした。いつかまた盛岡を訪れ、短歌づくりを楽しみたいと思っています。

【審査員講評】
（松田）愛知県から遥か北の東北、盛岡の大学に進学されたお子さんを案ずる親御さんの心は如何ばかりかと様ざまに想像します。「抱き守れよ」と願いを託す盛岡の空は、きっと澄みきっていたことでしょう。
（山本豊）勉学のために、故郷を離れて盛岡で暮らすことになった子を思う親の祈るような気持が伝わって来ます。祈る対象が「もりおかの空」であることが、この歌に特殊性を持たせ内容のある歌となっています。
（赤澤）作者のお子さんは盛岡で学んでいるのでしょう。盛岡にいるお子さんをいつも心配していると思います。このような歌は、小さくまとまってしまう場合が多いのですが、下の句を大きな景でまとめているところに魅力を感じます。
（山本玲子）啄木は盛岡を「自然の大殿堂」と述べ、さらに「学ぶべき大学が、塵の都のいかめしい大建築であるとは思へない」とも述べている。遠い異郷の地から盛岡に来て学ぶ子等に、特別の恩寵があることであろう。

年間奨励賞（二首）

綿雪の開運橋に点る灯に御伽幌馬車渡り観るよな

釜石市　中嶋　多喜子

【受賞者からのコメント】
高校十六才の時和歌にふれそれからこの齢まで継せることなく愛し積んだが今だ道草のまま。いいんですこのままで。
四季折々に発刊する「さちぐさ」日日の生活に我が思いを載せ静かに胸に畳み終生の愛とします。

【審査員講評】
（松田）綿雪の降る開運橋を、御伽話さながらに幌馬車が渡ってゆく。そんな光景をふっと錯覚してしまいそうな一齣……果して夢か現か。
（山本豊）冬の開運橋の情景がメルヘンの世界を思わせてくれる歌です。開運橋をこのように詠った歌はこれまでになかったと思います。雪が単なる雪ではなく、「綿雪」であることが、この歌の抒情性を深めています。
（赤澤）この歌はその発想が豊かだと思います。それが個性になっています。雪と灯りと鉄の橋に「御伽幌馬車」を感じたところは卓抜だと思います。結句の「渡り観るよな」は、やや不安定かも知れません。また挑戦してください。
（山本玲子）ライトアップされた冬の開運橋はメルヘンチックだ。「シンデレラ」は最終電車に乗り遅れまいと急ぎ足で盛岡駅に向かったのかもしれない。…という空想だけでなく、作者は幌馬車のわだちを確かに感じたのだろう。

「ウイルスを運ばぬように」俯きて着任の春に清き山あり

盛岡市　郷家　美磨

【受賞者からのコメント】
六年ぶりの盛岡。コロナ禍の転勤は緊張を伴うものでしたが、引越の日に車からひっそり見た岩手山の美しかったこと。懐かしいやら眩しいやらで不覚にも落涙。「よし！まだ頑張れる」と力強く励まされました。この街が好きです。

【審査員講評】
（松田）「ウイルスを運ばぬように」は作者の心の声。着任する者が清き山河を汚してはいけない……謙虚な作者の心が垣間見えます。
（山本豊）県外から盛岡に異動して来た方でしょうか。新型コロナウイルスの感染者の少ない盛岡に来た作者の遠慮がちな様子が伝わってきます。その作者を救ってくれているのが、「清き山」であることが、この歌に深みを与えています。
（赤澤）新型コロナウイルスは、数多く詠まれている素材ですが、作者独自の捉え方が求められます。新任地となった盛岡への気遣いを歌にした感覚が素材で良いと思います。結句の山を具体名で書いてみる方法もあると思います。
（山本玲子）時節柄、都会から赴任で土地の人を不安にさせまいとする心優しき作者。赴任の朝はうつむき加減だったに違いない。しかし盛岡駅の直前、目に飛び込む清き岩手山。恐らく私は作者以上に安堵してしまった。

〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌』詠（うた）

第十四回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。
四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三四一首（一般部門）の中から第十四回目となる年間優秀作品が決定いたしました。
今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。誌面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

擬宝珠（ぎぼし）下
染物流し藍（あい）揺れて
職人巧古都（しょくにんたくみこと）守りたり

盛岡市　三澤　信裕

【受賞者からのコメント】
過分な思いがけない通知を頂き驚きと恐縮の至りです。上の橋下、木綿の藍染流しは古都盛岡の情緒と堅実な土地柄を彷彿させ心に染みる。いつまでも情緒ある風情と堅実性、伝統技を失わない盛岡であって欲しい。

【審査員講評】
（松田）上ノ橋界隈の染物流しの光景を、丁寧に見て詠われています。声に出してみるとポキポキ折れる感じがしませんか。助詞を補って滑らかな表現にするとよいでしょう。
（山本豊）盛岡の歴史の一面を情景豊かに表現しています。擬宝珠は、中津川に掛かっている上ノ橋と下ノ橋に現在各々十八個づつありますが、とても風情を感じさせてくれます。染物職人たちが、中津川で藍染の染料を洗い流している様子が素直に伝わる歌です。
（赤澤）技術は昔の方法を変えて、時代とともに変化してゆく。それを進歩と言うのはやむを得ないだろう。その中で、昔ながらの方法を守り続けている人がいる。それが、この歌の主題である。「藍揺れて」に作者の心を見る。
（山本玲子）「ふるさとの歌に向かいて言うことなし」と言いたい。初夏の雫石川の水音、風のささやき、向こうに見える岩手山が時を越えて眼前に迫ってくる。私はこの歌が好きだ。なぜならこの歌は間違いなく古都盛岡を言い表しているから。

年間優秀賞（二首）

雪形（ゆきがた）の鷲（わし）がくっきり浮（う）き上（あ）がり
今日は畑（はたけ）に
石灰（せっかい）を撒（ま）く

盛岡市　中島　久光

【受賞者からのコメント】
市民農園の募集を公報で知り、庄ケ畑のファミリー農場の一画をお借りして7年になります。岩手山頂に鷲の雪形が表れた時が、石灰を撒く目途にしています。実際は家内が農作業のほとんどをしております。

【審査員講評】
（松田）岩手山は「岩鷲さん」と呼ばれて親しまれてきた名峰です。山肌の残雪が羽を広げた鷲に見える頃が春耕の目安とされてきました。下の句の具体も効果的です。
（山本豊）雪形が鷲が翼を広げているように見えるところから、岩手山は岩鷲山とも呼ばれています。岩手山に雪形がくっきりと見え始めると農作業の時期となります。畑に土壌改良のための石灰を撒くという具体的な行為が、この歌を実質のあるものにしています。
（赤澤）岩手山を巧みに詠っている。残雪の鷲の形は農作業の標となっている。この歌は、上の句を受けて下の句に具体的の畑作業を述べているだけである。それがこの歌を成功に導いた。短歌は多くを語らないことで鮮明となる。
（山本玲子）「地に足がついた歌」とはこのことだ。岩手山とともに盛岡人の営みがある。今年もきっと豊作だろう。秋には都会で暮らす子供たちに故郷の味覚が届けられるに違いない。その日のために今日一日の精を出すのだ。

辛（つら）い時（とき）いつも仰（あお）ぐは岩手山（いわてさん）
強（つよ）く生（い）きよと
鼓舞（こぶ）してくれぬ

盛岡市　小林　貴史

【受賞者からのコメント】
十九の春に盛岡に来て住みついて、盛岡の人を娶り、盛岡訛りの子達が育った。
いつの間にか八十路を越してしまったが、自宅からも見える崇高な岩手山に毎日癒やされながら、楽しく元気に暮らして参りたい。

【審査員講評】
（松田）盛岡に暮らす人の多くは日々見慣れた山ですが「強く生きよ」と気持をふるい起こさせ、励ましてくれる山であることをあらためて実感しました。
（山本豊）石川啄木の「ふるさとの山に向かひて／言ふことなし／ふるさとの山はありがたきかな」を思わせる歌です。私の住む盛岡市好摩からは、東に姫神山、西に岩手山が真近に見えこの歌に共感するものが大であります。山が信仰の対象であったことを理解させてくれます。
（赤澤）作者の生きて来た背景は判らないが、岩手山に励まされて来た。人間の未来は判らない。力を尽くしても、上手く行かないことがある。そんな時、作者は岩手山を見つめる。答えは教えてくれないが、励ましてくれるのだろう。
（山本玲子）人生にはいくつもの乗り越えるべき壁があったり、受け入れなければならない時もある。あるいは時間が解決してくれることだってあるかもしれない。その時々、一人ぼっんと佇む先に、遠く近く見え方は違えど岩手山が力強く背中を押してくれるのだ。

年間奨励賞（二首）

初（はじ）めてのさんさ踊（おど）りに
魅了（みりょう）され
夢中（むちゅう）で手拍子（てびょうし）二歳（にさい）の娘（むすめ）

岐阜県可児市　有田　峻

【受賞者からのコメント】
初めて訪れた盛岡。この地で、つなぎでつなぐ盛岡さんさ踊りを拝見。太鼓や笛・唄・踊り手に魅了され、二歳の娘は夢中で手拍子を打つ。まるで、自分が踊り手のように…。いつの日か、成長した娘と共に盛岡へ、再び。

【審査員講評】
（松田）二歳の女の子の、あどけなく楽しそうな手拍子と表情が見えるようです。「サッコラチョイワヤッセ」囃子言葉がきっと幸せを運んでくることでしょう。
（山本豊）祭りには人間の血を沸き立たせる根元的な力を持っています。二歳の娘さんも、たとえ初めであってもそれが感じられ手拍子を打ったことと思います。とても明るく、読む側に元気を与えてくれる歌です。折しも「盛岡さんさ踊り」が三年ぶりに開催されます。
（赤澤）夏祭りのさんさ踊りを見ているお嬢さんを逃さず活写した。さんさ踊りの短歌は数多くある。だから難しい。他の人の目に映らないことを見なければならない。作者の目には、美しい短歌一首を生み、思い出のひとつとした。
（山本玲子）生まれて初めてさんさ踊りを見たら、太鼓と音乱舞、笛の音が切れ目なく通り過ぎてゆく。私だったら、もう圧倒されて瞬きもせずにその場に立ちすくんでしまうかもしれない。二歳の娘さんは大物になる！

図書室（としょしつ）の
窓（まど）に親（した）しき岩手山（いわてさん）
一礼（いちれい）をして旅立（たびだ）つ朝（あした）

秋田県大仙市　鈴木　仁

【受賞者からのコメント】
平成も三十年を数える冬、私は仕事で盛岡にいた。職場は車で一時間程の所だったが、当初は新幹線に乗っていれば着く東京よりも遠く感じられた。しかし春になり転勤となると、毎日見ていた岩手山が励ましてくれた。

【審査員講評】
（松田）作者の通う大学の「図書室」でしょうか。その窓から見える岩手山にいつしか親しみを覚えるようになり、卒業の朝「一礼をし」た作者の人となりも滲む表現です。
（山本豊）図書室の窓から数限りなく見てきた岩手山。その岩手山に向かって旅立つ朝に一礼をしたという事実に心引かれます。余程岩手山に対する思いが深くなければこういう行為はなさらないと思います。「旅立つ」の具体的内容が解かるようにすれば良かったと思います。
（赤澤）この短歌にも岩手山が出て来る。岩手山は郷愁を誘うのであろうか。図書室の窓から美しい山を見たのだ。作者は岩手生まれの人かも知れない。旅立ちは人の心に波紋を起こす。上の句を下の句がしっかりと受け響いている。
（山本玲子）学生時代が鮮やかによみがえってくる。そして慣れ親しんだ岩手山に別れを告げるシーンはじーんと来てしまう。何かドラマでも見ているようなこの歌に、しばし立ち止まって会話をしたくなる。

〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌』を詠う 第十五回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。
四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三七二首（一般部門）の中から第十五回目となる年間優秀作品が決定いたしました。
今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。誌面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

この街は何か良い事有りさうな
開運橋とふ
橋を渡りぬ

盛岡市　佐藤　忠行

【受賞者からのコメント】
ゆったりと流れる母なる大河北上川の清流手入れの行き届いた土手岸の花壇の四季の花々、流れの先に父親の如く悠然と聳える岩手山、盛岡の表玄関ともいえる開運橋からの眺望は渡る人々に、安らぎと幸せ、希望を与えてくれ、盛岡のパワースポットです。

【審査員講評】
（山本豊）多くの人の感じる気持を単刀直入に表現した歌である。開運橋という名前は、誰にでも何か良いことがありそうな感じを与えてくれる。その橋を渡りながら、遠くに見える岩手山や橋の下を流れる北上川は心を和ませる。
（赤澤）開運橋を詠んでいる。名前の由来は解からないが、作者は良い名前だと思ったのだろう。渡れば何か良いことがある気がしたのか。開運橋は二度泣き橋の別名を持つ。これを素材にしても作れそうだ。新たに挑戦してほしい。
（山本玲子）開運橋という名の橋は盛岡を合わせて北海道・東北を中心に６つあるそうだ。何か良いことがあってほしいという北国の人々の願いが込められている。盛岡駅を出て開運橋を渡った旅人の期待が古の人々の思いと重なる。
（吉田）盛岡駅に降り立ち正面の道路をまっすぐ進むと大きな橋があります。その橋の名は「開運橋」。旅人でもそこに住む者でも開運橋を渡る時の楽しい気分、ほのかな期待をリズムよく表しました。愛唱歌になる歌ですね。

年間優秀賞（二首）

啄木の新婚の家君と吾の
靴をぴたりと
寄せて揃へき

奥州市　遠藤　カオル

【受賞者からのコメント】
若き日に君と「啄木新婚の家」を訪れた際、玄関で二人の靴をぴたりと寄せて揃えたときのことを短歌に詠みました。あのときの勇気、嬉しさと恥ずかしさ、一途な思いが蘇り、幸せな気持ちになります。また訪れたいですね。

【審査員講評】
（山本豊）啄木の新婚の家を訪れた若き日の思い出を詠い、情の深い歌である。靴をぴたりと寄せて揃えたと表現し、共に訪れた相手への思いの強さを感じさせる。具体的事実のみを述べたことにより、感情の甘さを押さえている。
（赤澤）啄木の新婚の家を素材に上手く詠んでいる。夫婦で訪ねたのであろう。靴を素材にした着眼が良い。「ぴたり」が効いている。短歌の詩形を活かし巧みに詠んでいる。作者の感性の鋭さに驚き、気持ちの優しさに心惹かれた。
（山本玲子）「ぴたりと寄せて」という言葉にやられた。まるで啄木の新婚時代の初々しさをつれてきたように感じるのは私だけではないはず。「君と吾」という表現もいい。仲睦まじく二人腕組みをしている様子まで映しているようだ。
（吉田）作者は石川啄木と節子との短い新婚生活を知っていたのでしょう。自分と夫の靴を「ぴたりと」寄せて揃え、二人の生涯に思いを馳せ、自分たちの夫婦生活の平穏を祈ったのでしょうか。初々しくも情感のこもった歌です。

ふるさとの
鬼の手形を取り囲み
眺める子らは瞳をこらす

盛岡市　赤坂　昌信

【受賞者からのコメント】
三ツ石神社の鬼の手形の岩の周りに集まり手形が何処にあるか探す子供達の表情を詠みました。岩手の語源になったともいわれる説明を聞き興味津々の子供達が可愛い。選んでいただきありがとうございました。

【審査員講評】
（山本豊）盛岡市の三ツ石神社には、鬼が手形を押したという伝説のある三つの大きな岩がある。岩を取り囲み手形を見つけようと瞳をこらす子供達の情景には、ほのぼのとした優しさが感じられる。私は手形を見つけられなかった。
（赤澤）三ツ石神社の鬼の手形を素材にして、子らを見つめる作者の気持ちが優しい。この神社は私の家に近く子どもの頃によく遊んだ。私たちも鬼の手形があるものと思っていた。子らの興味は時代を経ても変わらないと知った。
（山本玲子）大人たちは「岩手」の起源として思い浮かべるのだが、子供たちの感性はもっと鋭い。鬼の姿かたちを想像し、どれほどの力でこの岩に手形を残したのかと目の前に広がる世界に興奮しているのだ。
（吉田）三ツ石神社にある巨石には鬼の手形が残っているそうです。保育園児でしょうか。「見えないよ」「どこ？」「あったあった」などと賑やかに話しているようすが浮かびます。そんな子供たちに未来への希望を感じる作者です。

年間優秀賞（二首）

城跡に銀杏の黄葉
散りしとき歌碑に触りて
軽く音立つ

奥州市　遠藤　カオル

【受賞者からのコメント】
友人と城跡を散策していたときに、こつんこつんと音がするので、何の音かなと辺りを見回すと、扇形の銀杏の黄葉が次次と散り、その柄が歌碑に触れるときの音でした。時季になりましたら、また体験したいと思います。

【審査員講評】
（山本豊）岩手公園には、石川啄木の有名な歌「不来方のお城の草に寝ころびて」の歌碑がある。銀杏の黄葉が散りながら歌碑に触れた時、かすかな音がするという把握には情感があり詩情がある。瞬間を捉えて歌に深みが加わった。
（赤澤）この歌はまさに短歌という感じがする。作者の観察は細部まで行き届いている。しかし、それは説明ではない。感性が詠ませたのだろう。このような歌を作る作者は羨ましい限りだ。さらに感覚を研ぎ澄ましてほしいと思う。
（山本玲子）もちろんこの歌碑は啄木の「空に吸われし十五の心」だろう。歌碑とともに季節が巡ってゆく。これからも世代を超えて歌碑は力強く訴えるに違いない。啄木も季節の音とともに自然の営みの中で楽しんでいるに違いない。
（吉田）岩手公園の「不来方の」の啄木歌碑のことでしょう。作者は城跡を訪れ歌碑の前に佇んでいます。銀杏の葉が散って歌碑に触れる音を作者の耳は聞き留めます。繊細で丁寧な詠み方に秋の公園の寂しさが伝わってきます。

年間奨励賞（二首）

雪積る枝に
小さき蕾もつ
石割桜よ春にまた見ん

千葉県浦安市　岩田　一

【受賞者からのコメント】
昨年夏盛岡を訪れ『啄木新婚の家』でこの催しを知り応募する様になりました。その後秋冬春と再訪し盛岡の街を堪能しています。街並が明治昭和の面影を残す建物が多く道の広さや街路樹と共に心を落ち着かせてくれます。

【審査員講評】
（山本豊）雪の積った石割桜の枝の小さな蕾が花を咲かせる頃にまた見に来たいと詠って、読む者に明日への希望をいだかせてくれる歌である。人間が花や木を愛でるのは何に因るのかということが静かに伝わってくる。
（赤澤）作者は旅の途中で冬の石割桜を観た。そして蕾に心が動いたのだ。詩の感性を持った作者である。花の時期に石割桜と再会できたのだろうか。歌に詠まれたものの時間は止まる。さらに歌に磨きを掛け精進してほしいと思う。
（山本玲子）石を割るほど力強いはずなのに、か弱い花を咲かせることにある種新鮮な驚きを感じる。「美しいもの」というのは弱さだけではない。強さを備えてこその本当の強さだ。作者はそこに注目したのだ。
（吉田）盛岡の春に先駆けて咲く石割桜ですが作者は冬に訪れたのでしょう。この雪を被った小さな蕾が春にいっせいに咲くのだと思うと愛しさもひとしお。優しい眼差しが印象的です。咲いた姿もご覧になったでしょうか。

“啄木のふるさと”『もりおかの短歌』詠まち 第十六回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。

四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三五三首（一般部門）の中から第十六回目となる年間優秀作品が決定いたしました。

今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

光さす
南昌荘の床もみじ
遊びいる子の歌を映して

秋田県大仙市　鈴木　仁

【受賞者からのコメント】
銀杏の黄葉と楓の紅葉が、濡れた敷石に美しく降り続く南昌荘を訪ねた。秋田との縁も深いこの建物が今に遺り、人々の憩いの場となっているのが嬉しくて何度も足を運ぶ私の横を、幼い女の子が駆け抜けて行った。

【審査員講評】
（山本豊）南昌荘は明治時代に建造された建物であり、時ながく磨かれた木の床に映っているもみじは、おもむきを一層深めている。下句の「遊びいる子の歌を映して」は、詩情を深めた表現であり、読後感が長く心に残る。
（赤澤）美しい抒情歌である。南昌荘に行ったことのある人であれば、この歌の味わいが良く分かるだろう。古い建築物であるが、清楚で訪れる旅行者を持て成してくれる。作者は優しい言葉でそれを詠んだ。賞に相応しい歌だ。
（山本玲子）小春日和の休日、刹那のひと時を南昌荘で交わる「もみじ」と「子供」。共に移ろう季節の中で振り返ることもないだろう。啄木も、歌にこの一瞬を閉じ込めるか、小説の一コマとして物語にするか迷ったに違いない。
（吉田）南昌荘のよく磨かれた床に映る色鮮やかな紅葉を詠んだ作品。その幻想的な美しさは古（いにしえ）から現代までの遊ぶ子どもたちの歌も包み込んでいるようである。視覚的にも聴覚的にも奥行きのある優れた作品である。

年間優秀賞（二首）

啄木のゆかりの街を
歩みゆき旅のをはりに
鉄瓶を買ふ

奈良県奈良市　和田　康

【受賞者からのコメント】
啄木と鉄瓶とコーヒーの旅でした。旭橋から望む岩手山はとてもきれいでした。「一握の砂」は私の教科書で読むたびに仕掛けてきます。鉄瓶はもう完全に家族の一員になっています。私はほんとうに幸せ者です。

【審査員講評】
（山本豊）啄木に関わる歌は数多く詠まれているが、下句の「旅のをはりに鉄瓶を買ふ」という事実のみを詠うことにより、これまでの啄木に関わる歌にありがちな、情のですぎた歌と一線を画している質の高い作品である。
（赤澤）作者は奈良県から訪れた。石川啄木に憧れを持っているのだろう。お土産に南部鉄瓶を購った。四句の「旅のをはりに」が歌に輪郭をと与えた。鉄瓶は作者に折々旅を思い出させてくれるだろう。記憶に鮮明な歌である。
（山本玲子）正直に言うと私は、こういう飾らない歌が好きだ。盛岡の確かな思い出として、ずっしりと手のひらに乗った鉄瓶を想像せずにはいられない。月並みかもしれないが、お茶を飲むたびに盛岡を振り返ってもらえたらと思う。
（吉田）啄木に心惹かれて訪れた盛岡はどんな街だっただろうか。ゆったりとした調べと下の句に作者の旅への満足感が表れている。お土産に買った鉄瓶は使うたびに盛岡の街を思い出させてくれることだろう。

公園の羅漢如来の
祈る手に
飯盛るごとく雪降り積もる

盛岡市　西川　政勝

【受賞者からのコメント】
この公園は、昔の寺院跡で今は餓死供養のために作られた二十一体の石仏を残すのみである。この石仏は一八四九年の完成以来、風雪に耐え人々の暮しを温かく見守り、その祈る手に雪積もる様は、恰（あたか）も飯盛るごとく見える。

【審査員講評】
（山本豊）江戸時代に盛岡藩は四大飢饉といわれる大凶作により多数の餓死者が出た。死者の供養のために建立された十六羅漢と五智如来の石仏の手に、飯を盛るように雪が降り積む情景は、歴史の重さを感じさせる内容の濃い歌である。
（赤澤）比喩が卓抜である。それを思いついた瞬間に歌はできただろう。比喩の歌は、それが優れているかどうかで決まってしまう。これを詠んだとき、作者はほくそ笑んだに違いない。この歌に出会えたことは私の幸福でもある。
（山本玲子）誰しもこの歌を見たら雪が降り積もった羅漢公園が目に浮かぶだろう。と同時に作者のユーモアのセンスに脱帽する。祈りが叶ったのか、飯を盛られた「願ったり叶ったり」の羅漢如来はどこかお茶目に思える。
（吉田）盛岡市茶畑のらかん公園には十六羅漢と五智如来が広場を囲んで座していらっしゃる。飢饉による餓死者を供養するために造られたことを思うと、下の句にこめられた鎮魂の気持ちが感慨深い。格調高い秀作である。

年間奨励賞（二首）

もりおかの
夏はさんさの幸呼来と
太鼓の音で幸せ願う

盛岡市　赤坂　昌信

【受賞者からのコメント】
年間奨励賞をいただきありがとうございました。さんさ踊りの掛け声を詩に入れようと色々考えましたが、「読んで字の如く」としたのが良かったのかなぁ！副賞の木彫の盾が素敵だと思います。

【審査員講評】
（山本豊）昭和五十三年に開催されたさんさ踊りは、今年で四十七回目を迎えた。笛や鉦の音、そして何より和太鼓の迫力に満ちた響きは、踊り手にも観客にも生命の尊さを感じさせる。全ての人間が幸せであることを願わずにいられない。
（赤澤）作者は昨年、優秀賞を獲得している。二年続けて賞にはいるのだから実力者だ。「さっこら」はさんさ踊りのかけ声の一部だが、「幸呼来」と掛けたのは、誰か知らないが上手い。こう思ってかけ声を発すれば楽しいだろう。いかに言葉を選ぶかが、短歌を決める。
（山本玲子）盛岡の夏の夜空に人々の願いを乗せたさんさが舞う。単なる掛け声だったかもしれないし、できた当初には意味があったかもしれない。大切なことは正解が何かではなく、幸せを願う心で歌い継がれていることだろう。
（吉田）盛岡の夏と言えば「さんさ踊り」で、踊るのも見るのも楽しく心が浮き立つ祭りである。弾むようなリズムと勢いのある言葉の選択でさんさにふさわしい一首に仕上がった。踊る者見る者の明るい笑顔が浮かぶ作品。

追憶に恥る窓辺や
不来方の城址眺める
冬の病室

青森県青森市　加藤　健一郎

【受賞者からのコメント】
不来方の城址を眺めながら、来し方に思いを馳せる。浮かんでは消える様々な出来事。もしも病室でなかったら、冬でなかったら全く違う景色に見えるのだろう。そんな気持ちを歌にしました。有難うございました。

【審査員講評】
（山本豊）何かの病気で入院を余儀なくされている作者の心情が静かに伝わってくる。冬の病室の窓辺から、追憶に恥けながら不来方城址を眺めている、というだけの感情を抑えた表現が抒情性を高めている。
（赤澤）知人の入院を詠んだものか、自身を詠んだものかは分からない。しかし、病室の持つ陰鬱さを表現している。「もりおかの短歌」には珍しい内容だろうが、歌はしっかりしている。この歌も抒情詩と言って良い歌である。
（山本玲子）岩手医大が内丸にあった頃を想起して歌にしたのだろうか。いやいや作者が実際に入院しているのだろうか。いずれにしても、人生の中で自分を見つめ直す時期も必要だと思う。そのときは私も不来方を思うことだろう。
（吉田）過ぎ去ったさまざまなことを思う病室の窓辺から不来方のお城の跡が見える。物静かな詠みぶりは作者の追憶が豊かで満ち足りたものであることが自然と想像される。ご病気の快癒をお祈りいたします。